

2019年6月19日(日) マルコによる福音書 1章 1-8節 西田浩子牧師

この世には、二つの種類の宗教がある。第一は、人間が神を探すがゆえのもどかしさ、焦りの気持ちから生じた宗教であり、これはまるで人間がはしごを作り、天に上がろうとして、そのはしごをしきりに伸ばすことと同様である。しかし人間がいくらのはしごを高く伸ばしてみても、天まで達することはできない。第二は、神様がご自分で私たちを救ってくださるために、天からはしごを下ろされる場合である。これはまさに、私たちの信じるキリストの御力であり、神様の御子イエス様が、ご自分の天の場所を捨て、聖霊によりおとめマリアの胎を通して人の体をまとい、この地に来てくださったことである。完璧な神が、完璧な人となられ、人間の間にとどまり人間を神へと導かれる偉大な御力である。これがまさにキリスト教の力なのである。

マルコは紀元 64 年から 70 年の間にローマでこの福音書を書いたと考えられている。マルコによる福音書の 1 章 1 節の書き出しは、「神の子イエス・キリストの福音の初め」とあり、イエス・キリストの福音は、次の 2 節以下の洗礼者ヨハネの登場と活動によって始まったことを語っている。福音とは、「良い知らせ」good news という意味である。「神の子」という敬称について、マルコはイエス様が地上において既に「神の子であった」と信じているという前提に立ってこの福音書を書いているのである。「神の子」という称号は、イエス様に関する称号の中で最も重要なものでマルコによる福音書では 1 章 11 節の受洗の時、9 章の変貌（変容）の時、15:39 の百人隊長の告白の時などで計 6 回用いられている。「イエス・キリスト」の〈キリスト〉は名前ではなく、「油注がれた者・メシア」という意味の敬称である。

「神の子イエス・キリストの福音の初め」とあるが、この「初め」という語は、ヨハネによる福音書の冒頭において「初めに言があった」、旧約聖書創世記 1 : 1 にも「初めに神は天地を創造された」とある。

「初めに」という言葉は、ギリシャ語で「アルケー-arche」という言葉で、その言葉をマルコは福音書 1 章 1 節に用いている。創世記もヨハネ福音書も、「初めに」と言う言葉で始まっているが、今日のマルコによる福音書の「初め」というのはその意味が違う。それは、創世記やヨハネ福音書が、「この世の初め、あるいはその前に何があったか」を語っているのに対して、マルコは、「神の子イエス・キリストの福音」の初めを語っているということである。4 つの福音書（マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ）の中で、マルコによる福音書が一番古い福音書でありまさに「キリストの福音の初め」はマルコにある。福音という言葉はギリシャ語では「ユー-アングリオン」で「ユー」は「良い」という意味、「アングリオン」は「知らせ」という意味で、「良い知らせ」という意味となる。

ラテン語で「隠された神は、明らかになった神」（Deus absconditus, Deus revelatus）という語がある。マルコによって隠し、同時に現れているイエス・キリストの福音である。マルコが言っている「福音」good news という言葉は、主イエスがお語りになった教えだけでなく、主イエスの、十字架と復活によって実現した救いの出来事をも表している。「イエス・キリストの福音」とは、神がイエスを、キリスト（救い主）として遣わして下さり、そのイエス・キリストの十字架と復活に至るご生涯によって罪人に赦しを与えて下さった、そこに、私たちの救いが実現している、という良い知らせのことである。

マルコによる福音書 1 章 2-3 節には、旧約聖書のイザヤ書(40 章 3 節)、出エジプト記 (23 章 20 節)、マラキ書 (3 章 1 節) の言葉が引用されている。

マルコによる福音書 1 章 2-3 節「預言者イザヤの書にこう書いてある。「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう。荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」旧約聖書全体を貫いて語られてきた「望み」の言葉が、この 2-3 節に要約されて記されている。イザヤ書 40 章 9 節「高い山に登れ 良い知らせをシオンに伝える者よ。力を振るって声をあげよ 良い知らせをエルサレムに伝える者よ。声をあげよ、恐れるな ユダの町々に告げよ。」ここで書かれている「良い知らせ」もマルコによる福音書の「ユース・アングリオン」である。そして、このマルコにおいて、その「望み」の約束が、今ここで成就していくのだ、という喜びが語られている。主イエス・キリストの福音の出来事は、神の言葉に従って起こった救いである、とマルコは喜びをもって語るのである。

詳しく見ると 2 節の前半は、「見よ、わたしはあなたの前に使いを遣わして」という出エジプト記 23 章 20 からの引用となり、出エジプト記では、あなたはイスラエルの民であり、使いは彼らを守る天使を意味している。2 節後半「あなたの道を準備させよう。」はマラキ書 3 章 1 節の言葉の引用で「神が神の前に道を備える使者を送る」という意味である。マルコは、マラキ書を引用してバプテスマのヨハネを登場させ、イザヤ書 40 章を引用して、救いの時が来た、まことの救い主が到来した「受難の僕」を宣言している。イザヤ書 40 章 3 節の「主のために」の「主」は神自身であり、第二イザヤは、荒れ野に神の恵みの時代が来るという慰めの福音を預言した（第一イザヤ 1—39 章、第二イザヤ 40-55 章、第三イザヤ 56-66 章）。洗礼者ヨハネは、旧約以来長い期間続いてきた最後の預言者であり、旧約聖書のすべての預言者の思いを身に引き受けて、イエス・キリストの直前にあって、その直接の道備えをした。それだけではなく、イエス・キリストの最初の証人でもあった。イエス・キリストの傍らに立って、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」（ヨハネ 1 章 29 節）とイエス・キリストを指し示した、イエス・キリストと同時代の人であった。ルカによる福音書によると、洗礼者ヨハネはイエス・キリストより 6 ヶ月前にエリサベトの胎に宿った（ルカ 1 章 36 節）。マルコ福音書 1 章 2 節の「わたし」というのは、神であり、「あなた」というのは、メシア・イエスのことである。「使者」および 3 節の「荒れ野で叫ぶ者」も洗礼のヨハネを指している。ヨハネが叫んだ「主の道」というのは、救い主イエスの歩む道である。ヨハネの授けていた洗礼は、4 節にあるように「罪の赦しを得させるため」の「悔い改めの洗礼」であった。悔い改めて罪の赦しを得る、という救いの印としてこの洗礼は授けられていた。洗礼者ヨハネは、マタイによる福音書においても「悔い改めにふさわしい実を結べ」（マタイ 3 章 8 節）と語る。悔い改めることは、罪の赦しの条件だからである。罪を赦し、救いに入らせるのは、ただ神の憐れみによるのであり、私たちはその恵みのしるしとして、父、子、聖霊による、神の側の約束による洗礼を受ける。聖書が教える罪というのは、人間にはこのような悪いところ、欠点があるというものではなく、人間とは根本的に神に背いているということで、「悔い改める」というのは、個々の罪を悔いるというよりも、全体として「向きを変えて帰る」という意味なのである。私たちの洗礼というものも、それが一つには悔い改めのしるしであることを覚えないのである。もう少し広く言うと、神様に立ち帰ること、神様の方へ向き直って生きるという決心のしるしである。そこにヨハネの洗礼の意味があった。しかしヨハネが人々に授けていた水の洗礼はあくまでも、救い主の到来への備えであった。罪人であり、このままでは救いにあずかることができないことを認めて、罪を悔い、神様からの赦しを求めて神様のもとに立ち帰ることが悔い改めるという

ことである。変わることは難しいことである。人はどんな時に変わることができるのであろうか。努力をすることで変わるのであろうか。聖書はイエス様がいらっしゃる場所において人が変わっていく有様を示している。5-6節「ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。」この描写は明らかに荒れ野で生活する人の姿であり、この時代からはるか昔にさかのぼる時代に、同じような出で立ちの預言者がいた。その人物について列王記下の1章7-8節に、次のように記されている。

「アハズヤは、「お前たちに会いに上って来て、そのようなことを告げたのはどんな男か」と彼らに尋ねた。『毛衣を着て、腰には革の帯を締めていました』と彼らが答えると、アハズヤは、「それはティシユベ人エリヤだ」と言った」。預言者エリヤの特徴を、「らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた」、と描いている。マルコによる福音書の洗礼者ヨハネの姿の中に再来のエリヤのような様子を見ることができるとも言えよう。しかしマルコによる福音書は、再来のエリヤについてのイエス・キリストご自身の言葉を後にこのように記している。

7節「彼はこう宣べ伝えた。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。」ヨハネは、「わたしよりも優れた方が、後から来られる。」と言ったのである。当時、ヨハネから悔い改めの洗礼を受ける人々が大勢いた。そしてその中から洗礼者ヨハネの弟子として、ヨハネのあとに従う者たちも出てくる。そのようなヨハネであるにも関わらず「わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。」と言うのである。主人の履物のひもを解くのは、僕の仕事である。しかしヨハネは、やがて来るべきお方と自分との関係を言い表すときに、「わたしは主人の履物のひもを解く僕にすぎない」とは言わずに、「自分にはその価値すらもない」とやがて来るべきお方の偉大さを表現している。イエス様はヨハネを「女から生まれたもののうち最も偉大だ」と評された。ヨハネはイエス様について、「聖霊と火によって脱穀場で麦の殻を焼き捨て、その実を一粒も漏らさず倉に収める」方であると語る。ヨハネの勧めは「良い実を結べ」であったがイエス様はどんな実であっても、その固い殻を焼き捨て、大切に倉に収めて用いてくださる方である。8節「わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。」ヨハネは自分が証しする方は主イエス・キリストは「聖霊によって洗礼を授ける」方である、と語る。ヨハネは「水」によって洗礼を授けられたが主イエスは「聖霊」によって洗礼を授けられるのである。両方とも、「罪の赦しを得させるための洗礼」には違いはない。異なるのは「水」と「聖霊」でその違いは大きいのである。主イエス・キリストがヨハネから洗礼を受けて水の中から上がるとすぐ、天が裂けて霊が鳩のように降り主イエス・キリストは聖霊を受けられた。そのことによって、私たちがあずかる洗礼、イエス様の救いにあずかる教会の洗礼は、水によってなされる洗礼でありながら、同時に聖霊による洗礼となったのである。イエス様が洗礼をお受けになった時、3つのことが起こった。一つ目は、イエスさまに向かって、天が開いたということ。二つ目は、神さまの霊が鳩のように降って来たこと。そして三つ目は、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という神様の声が聞こえたということである。天が開いたというのは、天国の入口が開いたということである。その入口までどのようにして登ったら良いのであろうか。キリストの十字架がその架け橋となる。聖霊がそこに導いてくださる。そして「わたしの愛する子」という神様からの御声が聞こえてくるのである。キリストが洗礼を受けられ、悔い改める群に加わって下さったということは、そのような

祝福が人々に及んだということである。また清められるためではなく、清める力を与えるために、イエス様はその洗礼を受けたとも言えよう。ところで、こびりついた汚れや油、がんこな汚れは水だけではなかなか落とせない。そういった汚れは洗剤を用いないとならないのである。私たちの罪を洗い落とすとき、水によっては洗い落とせない。「罪を洗い流す力」であるイエス様の愛の力が必要なのである。

「心に適う者」とは神がお喜びになる人を指している。主イエスが、私たちと共にその一歩を踏み出された時、神様は喜んでくださった。洗礼者ヨハネから洗礼を受けられた主イエス・キリストは、私たちの罪を引き受けて十字架への道を歩んでくださった。誰よりも苦しみの極みを歩まれ、誰よりも荒れ野を歩まれたのである。イエス様は、罪のない神の御子であられたにもかかわらず、罪人が受けるべき洗礼の中に入って行かれた。そのようにして、イエス様はご自身を低くされ、卑しくされ、罪人の一人となってくださった。このイエス様のお姿は十字架の死に至るまで貫かれたのである。まさにマルコによる福音書に記されるように、イエス様のご生涯の最初に位置している洗礼は、イエス様の地上のご生涯の最後に位置する十字架の死に直接に結びついているということをここで知らされるのである。イエス様は罪なき神のみ子であられたにもかかわらず、わたしたち罪人の中に入って来てくださり、罪人の一人に数えられ、十字架で神のさばきをお受けになられた。それによって、わたしたちを罪から贖い出してくださいました。そのイエス様の十字架の光が、もうすでにここに、イエス様の洗礼の場面に差し込んでいるのを見ることができるのである。